

景氣循環と寡占的競争

早川泰正

まえがき

景氣循環の理論とむすびつけて、その意味を正當に評價されなかつたものの一つに企業活動の競争的側面がある。所得分析の線にそう最近の景氣理論は、もつぱらアグリゲートの世界をのみ對象にしたから、そこでは個々の變數の態容について、おおく抑束的前提を必要とした。このことは、とくに市場における競争條件の變化を無視して、漠然と集合的試行誤謬を想定することにあらわれている。

いうまでもなく、競争行為の本質は、その不完全性、とくに寡占的狀態とその變化のうちに看取されるであろう。この見地にたつかぎり、價格政策をもつて代表される個々の戰略的變數の背後に、明白に競争の社會的條件を意識しなければならぬ。需要、供給函數の傳統的要具にもとづく價格理論と所得分析の關係を開拓するいみにおいて、かかる考慮は重要である。そして、この種の架橋作業は景氣循環のより根本的な理解に役立つであろう。循環をつらぬく趨勢因子の特徴の一つは市場組織の變化にほかならぬからである。

一 寡占的価格理論の位置

アトミスティックな不完全市場における均衡を一般化して、寡占的競争における不均衡におもむかしめたものは、需要函數と供給函數の非獨立性にかんする現實的認識であるといつてよい。ロビンソンとチェンバリンがともに對象とした世界は、(需要者の側からみた)財貨の非同質性という制約(下降的需要曲線)をもつにしろ、またその結果、産業均衡と過剰能力の兩立を可能ならしめるにせよ、本質においては古典的完全競争のそれと同じものであつた。需要函數と供給函數が、個々の企業の見地から所與とみなされるのはこのかぎりにおいてである。

價格理論の靜學的擴充にとつて、次になされるべき展開の方向を察知するのは困難でない。大數法則の適用をゆるさぬ競争市場にさいして、『他の事情に變化なし』の排除は、まづ一般均衡理論による擴充を想到せしめる。トリッフィンは企業間の競争的關係をその外部的相互依存性、すなわち市場のタイプの類型にもとめた。實際、獨占と競争のクライテリオンが(需要曲線の傾斜のごとき)個別企業の状態よりも、その競争的關係に依存すること(2)はたしかである。またそのために、市場のタイプにかんする詳細なリスト(3)があらたに要求されることも是認されよう。だが、このことと、價格理論にとつてはるかに重要な價格變化の解の決定とは全く別である。トリッフィンのように需要の個別弾力性の相關率(cross-elasticities of demand)をつみかさねて、市場の分類を精密化するだけならば、かえつて複雑な競争現象への埋殘を結果するにすぎない(4)。しかれば、部分均衡理論よりの脱却は、かの「正常價格」にかわる、あらたな解の決定性をもちえないであらうか。

寡占的競争の特徴は、相互に自己の競争的立場を理解し、そのゆえにライバルにあたえる影響とその反作用を、代的に豫定する少數の企業において、需要函數と供給函數が企業のストラテジを通して緊密に依存することである。

ゆえにこの場合、價格理論の傳統的思考にもとづくかぎり、決定的解は存在しないことになる。ひとは、おそらくここで、靜學的基盤にたち、この非決定性を決定化しようとする「ミックスド・ストラテジ」の理論が暗示するものをあげるであろう。しかし、行爲のあらゆる可能性をふくむ高度の一般化は、同時に寡占的競争の理解を極端に限定することを知らなければならぬ。なぜなら、寡占者は、いかなるいみにおいても、ストラテジと反作用の無限の可能性をもつものでないからである。

そこで、價格理論にとつて、この迷路より脱出する方法は次の考慮以外にないであろう。現實において企業の採用するいかなる行爲も、またその確率的可能性も、競争の社會的條件あるいは市場の特定の狀態より獨立ではない。トリッフィンの缺陷は、この後者のものを靜學的均衡の枠内で處理しようとし、そのために、市場の平板な類型化に終始したことにある。寡占的價格理論にとつて必要なことは、市場の無差別な列舉ではなく、また（本質において同じであるが）企業心理の内面性にわたるストラテジの無限の可能性への配慮でもない。寡占的環境の條件が變化するいくつかの特定の狀態のもとで、通常の企業活動がノーマルに要求する行爲の歸結を因果的に追及することである。

この見地からすれば、寡占的價格形成の一見そうおもわれる非決定性は、實は變化の社會的局面にたいし、それぞれ決定的意味をもつものでなければならぬ。

(1) カルダアは過剰能力と獨占利潤の共存を指摘することによりカーンの定理を現實的に修正している。N. Kaldor: Market

Imperfection and Excess Capacity, *Economica*, Feb., 1935, p. 46.

(2) R. Triffin: *Monopolistic Competition and General Equilibrium Theory*, 1949, p. 14.

(3) Triffin, Op. cit., p. 143.

(4) ヒックスの部分的安定条件を一般均衡理論に擴充したランゲン (*Price Flexibility and Employment*, 1944) の同様の成果を想起させる。

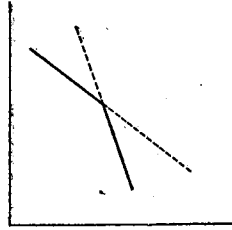
(5) Neumann and Morgenstern: *Theory of Games and Economic Behavior*, 1947, p. 143—165.

二 屈折需要曲線

寡占者はその価格政策を考慮するさいに、次の一組の豫想をもつことがかんがえられる。自己の価格引下げにたいしては、ライバルもこれに追隨して価格を引下げるであろう。しかし反對に価格引上げの場合は、ライバルはこれに追隨せず、現在の価格を維持するであろう。豫想のこの非對稱性にもとづき、寡占者の需要曲線はスムーズでなく、價格のある水準においてキンクをもつことになる。⁽¹⁾

しかし、純粹に企業の主觀的判斷の枠内で理解されるならば、屈折需要曲線は價格決定の問題にたいしてなんら解答をあたえるものではない。なぜなら、そこで寡占者の態度はライバルの反作用にかんする特殊の前提に依存し、その結果、寡占者が採用するであろう價格維持は、ライバルもまた同様であろうという暗黙の想定にもとづいているからである。例えば寡占者Aの豫想に反して、ライバルBが現實に價格を引上げた⁽²⁾と假定する。その場合Aの判斷は訂正されねばならず、その需要曲線は圖のしめすごとく、上半部においてより非彈力的となり、反對に下半部において

より弾力的となる。全體として屈折需要曲線はさきの鈍角型から反射型⁽³⁾に移動する。そしてこのあらたな需要曲線において、Aはさきの価格維持から現實に価格引上げに轉ずるであろうが、それだけではない。Aの引上げはさらにライバルBの側における當初の需要曲線を改變せしめるであろう。というのは、BもまたAの価格維持を豫想していたからである。要するに、この過程は部分均衡論的いみにおける試行錯誤にすぎないから、それによつて到達されるべき価格の方向とキントの位置を決定することはできない。



したがつて屈折需要曲線は、もしそれが價格理論に寄與するならば、企業の任意の豫想をこえる客觀的なクライテリオンをもたなければならぬ。若干のひと⁽⁴⁾はそれを景氣循環の異つた局面における企業の側の過剰能力にとめた。このことは需要函數と供給函數の明白な結合をいみするといつてよい。寡占的競争において、企業は需要者の選好とともに自己の生産費を十分顧慮するであろうから、需要曲線は寡占者ならびにライバルの供給條件を反映したものでなければならない。

すなわち、企業がおおく最適規模以下で操業している不況の收縮期において、一寡占者の價格引上げは容易にライバルの乗ずるところとなる。後者は現行價格かあるいはむしろ價格引下げ（收穫遞増）によつて、さきの寡占者の失う市場を簡單に獲得できるからである。これにたいし、一寡占者の價格引下げは、それにより市場を收奪され、高費用に移行する危険をもつライバルの側から、同様の引下げ政策をもつて報復されるであらう。鈍角型屈折需要曲線のいみする價格硬直化の傾向はこの時期の寡占的價格の状態をしめす。だが、好況期の進展につれて、需要曲線はこの

型から他の反射型に移動するであろう。けだし、需要の漸増は最適規模をこえる擴張と遞増的費用を結果するからである。この場合、価格引上げは寡占者とそのライバルにおいてともに是認されるであろうから、需要曲線は上半部において非弾力的となる。結局、景氣循環の全期間を通して、寡占的価格の動搖は、それが企業側の供給條件に依存するかぎり、下方に硬直的であり、上方に伸縮的である⁽⁵⁾。

さて、屈折需要曲線の積極的展開にもとづく以上の説明は、景氣循環の理解にとつて、なにを本質的に語っているであろうか。市場の組織あるいは競争の社會的條件の變化が、景氣の各局面において、企業の供給條件に投映されるであろうことはたしかである。だが、それはすべてではないであろう。そうだとしたら、寡占的価格の形成を企業の過剩能力の状態のみに結びつけることは十分な理解とはいえない。

さきの説明についていえば、それが短期供給曲線のみを対象にしていることは容易に指摘されよう。しかし、資本設備は好況の過程において増加されるし、また現實に増加するから、資本設備の不足にもとづく遞増的費用が明白に現出するか、いなかには明らかでない⁽⁶⁾。そして、これが明らかにされない以上、さきの説明における需要曲線の反射型への移動も、價格の上方への伸縮性も現實に説明されないはずである。

だが、次のことはさらに重要である。はたして寡占的價格の上方への伸縮性は遞増的費用のみに依存するであろうか。もしそうならば、事實上、回復期よりブームにいたる好況の過程は、先行する不況の間の過剩能力が完全に利用され、消滅されるまで開始されないであろう。そして、循環の各周期はそれぞれ自足完了的であり、たんに機械的に好況と不況を繰返すのみであろう。それならば、價格理論は、所得分析にとつて、すでに與えられた循環のいわば

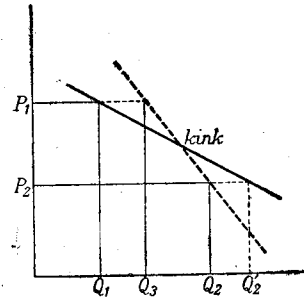
外縁から、好況と不況の價格狀態を附加的に描寫するにとどまる。兩者の間に架橋を施すいささかの理由も存しないわけである。

しかし、好況への發動力としての價格騰勢は、過剩能力の存在とはたして兩立しないであらうか。

- (1) 需要曲線の屈折にたいする理解はチャンベリンにある。Chamberlin: *Theory of Monopolistic Competition*, 6 th ed. 1950. p. 90.
- (2) P. Streeten: Reserved Capacity and the Kinked Demand Curve, *Review of Economic Studies*, 1950—51. p. 107.
- (3) 型の名稱は C. W. Efraymson: A Note on Kinked Demand Curves, *American Economic Review*, March, 1943. 248。
- (4) P. Sweezy: Demand under Condition of Oligopoly, *Journal of Political Economy* Aug., 1939. Streeten, Op. cit., Efraymson, Op. cit.,
- (5) Sweezy, Op. cit., p. 115. W. Fellner: *Competition among the Few*, 1949. p. 182.
- (6) R. F. Harrod: *The Trade Cycle*, 1936. p. 83.

三 需要曲線の移動と不可逆性

景氣循環の過程を通じて、寡占者の需要曲線が移動するのは、次の理由によるとかんがえてよい。過剩能力にもとづく費用條件の變化、市場の狀態にかんする長期的反響、競争度の變化。これらの要因ならびにそれにもとづく正常的需要曲線の移動について、もつとも重要な特徴はそれが產出量の相當の範圍にわたつて非對稱的であり、かつ不可



逆的であることである。いま価格 P_1 と産出量 Q_1 の座標から出發して、価格が P_2 に低下したとすれば、價格下落は需要曲線の非弾力化をとめない、産出量は初期の需要曲線における Q_2 でなく、 Q_2 に増加するにすぎない。そして価格が以前の水準 P_1 に復歸しても、需要曲線は復歸せず、産出量の減退は Q_3 にとどまるであろう。

需要曲線の移動のこの種の不可逆性は景氣循環の過程における趨勢因子に關係している。そして、不可逆性のこの見地からいえば、さきの諸要因のうちでもつとも本質的なものは、寡占的市場における競争度の變化にもとめられなければならない。なぜなら、後者は、それぞれ供給量の變化と企業の長期的配慮を通して前二者の要因に著しい影響をおよぼすからである。あるいはすくなくとも、前二者の作用は後者に明瞭に反映されるであろう。ゆえに、われわれは競争度の變化を惹起する市場組織の變動に關連せしめて、循環の過程における需要曲線の移動を議論することができる。

不況の深化につれて、價格引下げ闘争 (cutthroat competition) をもつて代表される寡占的競争の進展は、寡占者の間に相互に競争を回避して、自己の價格を維持せんとする慾求を生むであろう。この價格硬直化の傾向は鈍角型需要曲線のしめすところである。だが、一度硬直化した價格は、有效需要の増進とそれによる過剰能力の消滅をまたずしては騰勢に轉化されないであろうか。いなむしろ、大量の過剰設備のなかで、寡占者に共通の右の慾求は、たんに價格の個別的維持だけでなく、すすんで競争性そのものをも修正しようとする相互の了解に發展するであろう。激烈な價格闘争のうちに、おおかれすくなかれ、利潤の損失を経験した寡占的大企業の間における價格協定の可能性はこ

のことをしめしている。

それ自體としては、將來の不確定にたいして既存利潤を確保しようとする安全動機⁽²⁾に由來するが、この種の協定のはたす役割は景氣循環の全過程において重要な意味をもつことを知らなければならない。けだし、寡占者のおおきによつて共通に採用される價格政策は、過剰能力の存在にもかかわらず、戰略的に價格を引上げる⁽³⁾ことによつて次の好況への主要な端緒をひらくからである。

不況の進展をもつて開始される寡占的市場の組織的變動は、かくして寡占者の競争度と財貨の代用度を減少せしめるであらう。價格鬭争の過程を通じて、その下半部においてすでに非弾力化した需要曲線が、その上方への轉換にさいして舊曲線に復歸せず、全體として非弾力的需要曲線に移動するのはこうしてである。したがつて寡占的價格の變化は二つの部分に要約される。(一)不況において、寡占者の需要曲線の下半部は、ライバルの報復(價格鬭争の可能性)を考慮することによつて、非弾力化されるから、

fig. 1

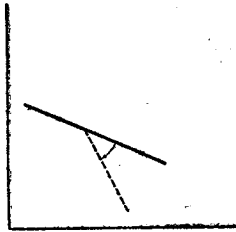
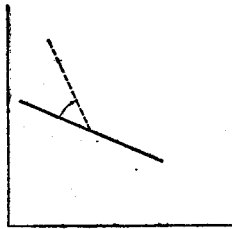


fig. 2



價格は硬直化する傾向がある(第一圖)。(二)しかし次に、價格鬭争を排除するために、寡占者がライバルと協定を結ぶならば、需要曲線は上半部においても同様に非弾力化され、價格引上げが双方に共通の政策となる(第二圖)。

(一)この種の協定をフェルナーは準協定(quasi-agreement)とよぶ。それが結託(coalition)やプールといかに異なるかは後

267. W. Fellner: *Competition among the Few*, Chap. VI, VII. をみよ。

(2) 「ミニ・マックス原則」における損失の極少化がこれにあたる。ゲームの理論の缺陷は市場組織のこの種の動學的變化をすべて代替的にしか取扱えないことにある。

(3) F. Sciovsky: *Welfare and Competition*, 1951. p. 390—392. をみよ。そこで展開されている事例は、ゲームの理論の動學的取扱にかんして重要な示唆をあたえている。

四 景氣循環の素描

いうまでもなく、寡占的市場は非同質的であるが、このことはさらに、價格協定の性格ならびにその影響をかんがえる場合に、決定的意味をもっている。

一般に競争市場の差別性(differentiation)は、需要者の見地からみた生産物の分化のみでなく、より重要な部分として、企業の供給条件の相違⁽¹⁾について問題にされなければならない。このいみの非同質性は寡占的競争の場合、次のことを結果するであろう。すなわち、寡占者が價格協定を通して結合するとき、それによる結合利潤は産業全體として極大化されるものではない。いいかえると、かかる集合的獨占の形式による總利潤は單一獨占の下におけるよりも小⁽²⁾であろう。供給条件を異にする大企業間の價格協定は、利害の完全な一致にもとづくものでなく、たんに價格闘争を回避するための一種の妥協にすぎない。ゆえにそれによつて、競争度を現實に減少せしめ、價格を硬直狀態から騰勢に導くことができたにしても、なお寡占者の潜在的競争性を減殺したことにほすこしもならない。協定の加入者

にとつては、結合利潤を極大化することよりも、はるかに自己の収入を増進することが關心事であろう。⁽³⁾そして後者の可能性は、同じ加入者であるライバルのぎせいにおいて、現實に存在する。かくして、(自明であるが)協定が販賣價格以外の供給條件を關知せず、寡占者がこの種の協定以上のものを要望しない事實のなかに、價格協定のもつとも重要な特徴を看取しなければならない。

共通の價格政策によつて最惡の事態を防止できた寡占者は、いまや、安全性への慾求からふたたび個別的極大化の原則にもどるのである。利潤確保が利潤極大の一變形にすぎないことを注意しなければならない。價格協定の枠内で、ライバルに對處する最有力の手段は、いうまでもなく、生産物の品質と費用の條件を改善するための技術的革新である。⁽⁴⁾寡占者は、價格鬭争への配慮から解放され、殘されたこの分野においてライバルを排除することによつて、市場と利潤の再分配を志向することができる。このいみからすれば、價格競争はむしろ寡占的市場のノーマルな特徴ではないかもしれない。⁽⁵⁾だがいづれにしても、改善された技術にたいする競争的採用は更新需要の大量の出現を誘動するのである。景氣循環の過程において、回復よりブームにいたる経路を直接に説明するものはこれである。

さて、以上のごとく、寡占的價格の騰勢と技術的改善をもつて説明される景氣の上昇運動が、企業側における過剩能力の存在と明白に兩立することは強調されなければならない。更新需要は資本設備の物理的損耗のみにもとづくものではない。そのはるかに大なる部分は經濟的排棄に依存する。不況の間に累積された資本設備は、それが物理的には健在であり、十分の稼働力をもつにかかわらず、排棄されなければならない。このことは循環の各サイクルが、事實上、それに先行するものより獨立でないことをしめしている。過剩能力は不況のみの周期的産物ではなく、各周

期を通じて受継がれ、しかも累増される遺産にほかならない。

かくして、寡占者による新技術の採用はあらたな競争の開始をいみする。供給の増加と新生産物の登場はおそらく財貨の代用性を増進せしめるであろうから、寡占者の需要曲線はふたたび弾力化されるであろう。しかしその弾力性が以前の状態に完全に復歸すると期待することはできない。すくなくとも、價格協定とその成果が寡占者の記憶とともに完全に消滅せざるかぎりはそのようである。

しかし次のことは十分の可能性をもつて期待してよい。すなわち、好況の最盛期は不況に轉化され、その間により成長した寡占者の間において、一層廣汎な、そのゆえにさらに大なる潜在的競争性を背後にもつ、協定がふたたび要求されるであろうことである。かくて、われわれは寡占的市場の周期的動搖をつらぬく趨勢因子を競争度と需要の弾力性をもつて特徴づけることができる。寡占者の需要曲線は、若干の反復を経過しながら、次第により非弾力的な方向に移動するであろう。そしてそれにともない、寡占的價格は趨勢的に騰貴することがかんがえられる。しかしそれとともに、これらの背後に成長せる巨大寡占集團のより大なる規模における對抗性がひそむことを知らなければならぬ。

- (1) アトミスティックな不完全市場の理論において、この點は十分考慮されない。チェンバリンの簡單な説明があるのみである。Chamberlin, *Op. cit.*, p. 110—113.
- (2) Scitovsky, *Op. cit.*, p. 382.
- (3) Fellner, *Op. cit.*, Chapt. VI.
- (4) Fellner, *Op. cit.*, p. 183—191.

(5) Fellner, Op. cit., p. 221.

五 所得分配の問題

寡占的競争にかんするこれまでの議論にもとづいて、需要弾力性の所得分配におよぼす効果を取扱う二つの理論を検討することができる。

ハロッド⁽¹⁾は需要弾力性の變化を所得水準の變動に結びつけて理解しようとした。すなわち、所得の増進と富裕につれて、ひとは財貨の價格差にたいして非感應的になるであろうから、一般に好況において需要の弾力性は減少するとかんがえる。平均収入と限界収入の差にかんするかぎり、この傾向は產出物一單位の利潤率を大ならしめるであろう。ハロッドは好況と不況の循環を通して利潤率の變動を問題にするさい、その論據を主としてこの「需要弾力性の遞減法則」⁽²⁾においている。好況において需要弾力性は減少するから、利潤率は大となるが、反對に不況においては所得の減退と貧困化により、ひとは財貨の代用にかんして敏感になるため、弾力性は増大して、利潤率は小となる、というのがその主張である⁽³⁾。

しかし、容易にわかるように、この説明は十分ではない。ここでは未だ企業の生産費の條件についてなにも言及されていらないからである。不完全市場において、獨占利潤が二つの部分、平均収入と限界収入の差のほかに限界費用と平均費用の差よりなることはいうまでもない。そこで、ハロッドの「收穫遞減の法則」⁽³⁾が登場する。しかしそれはさきの需要弾力性にかんする説明と必ずしも結びつくものではない。もし、ハロッドの二つの法則がともに同一の方向

に作用するならば、すなわち所得の増進とともに資本設備の完全利用が費用遞増の明白な事態を招来するならば、さきの主張のごとき利潤率の變動はさらに補強されるであろう。だが、ハロッドは正當にも資本設備にかんして、收穫遞減の適用を斥けているから、このことは妥當しない。そして、ハロッドにより收穫遞減の唯一の適用領域とみなされる熟練労働の不足についても、事態はそう簡單でないであろう。

結局、資本設備すなわち過剰能力の態容が明白にされない以上、ハロッドの主張するとき所得の分配が現實に景氣循環の過程を通して生起するか、いなかば明らかでない。いなそれだけでなく、さらに重大な疑問は、需要弾力性の變化を所得水準の變動と結びつけて理解した點にある。需要者の見地からのみいえば、ハロッドの主張は首肯されるかもしれない。だが、それはアトミスティックな不完全市場を対象にし、競争の社會的條件を一定と前提したうえで許されることにすぎない。

獨占度と所得分配の關係を追求しようとするカレッキの理論⁽⁵⁾はハロッドにたいする批判から出發しているといつてもよい。カレッキは獨占度——價格と限界費用の差の價格にたいする比率——を（當然のことながら）競争條件の指標とみなし、それとともに完全競争にたいする不完全競争の一般的特徴を、供給條件の側から、收穫不變の狀態にもとめている。後者は、社會の産業において比較的多數を占める工業部門において、平均賃銀曲線の形が一定の生産規模までは大體水平的であるという認識にもとづく。そこで、獨占度と收穫不變の右の想定から誘導される數式⁽⁷⁾

$$\bar{\mu} = \frac{E+O}{T} \quad \text{or} \quad \frac{W}{A} = \frac{1}{1+\bar{\mu} \frac{T}{W}}$$

景氣循環と寡占的競争

をもつて、カレッキは、獨占度と、貨銀にたいする販賣總額の比率が、相互に相殺されるかぎり、所得の分配は安定化する、という。だがこの數式は、もしそれが循環の過程における有效需要の狀態を有意義に説明するためのものならば、さらに重要な變數を必要とするであろう。寡占的競争の下で（カレッキ自身の指摘するように）完成財の價格は貨銀にたいし相對的に騰貴するから、このことは、獨占度の上昇と相まつて、右の數式において、貨銀の分配分を低下せしめることがかんがえられる。しかしそうだとすると、このこと自體が有效需要の狀態にいかん反映されるかは明らかでない。

そこで、われわれは必要な變數として、企業の總所得において減價準備の占める割合をかんがえ、寡占的競争における技術改善がそれいかに影響するかを考慮してみよう。カレッキはかかる基本的條件の變化が獨占度に影響することを指摘している。⁽⁸⁾しかしそれだけではない。寡占者による新技術の競争的採用、あるいは（より重要であるが）その潜在的可能性は、「頭わり費用」⁽⁹⁾の總額において減價準備の占める割合を急速に増大せしめるであろう。この種の減價準備が、その本質において、純投資のための純貯蓄と區別されえないことは明らかである。そして、有效需要の削減をいみするその連續的蓄積は、新設備への非連續的支出によつて、短期的にはもちろん、長期的にも平衡化されないであろう。

だが、問題はそれだけではない。寡占者が不測の損失より自己をまもり、さらにすすんでライバルにたいする金融的優位を獲得するための準備を積極的に考慮するならば、企業の總所得におけるこの種の蓄積部分は、さらに累増して、しばしば他の利子所得を侵略するであろう。循環の過程における有效需要の狀態はかかる考慮を別にしては十分

に理解されない。貸銀所得と非貸銀所得の單純な比率は、寡占的競争の下における所得分配の問題にとって、第一義的重要性をもつものではないのである。

- (1) Harrod: *Trade Cycle*, p. 75—88.
- (2) この主張はハロッドの動學的決定因を構成し、景氣循環の過程における乗數の大きさに影響する。
- (3) このほかにハロッドの「主要費用の可塑性」があるが、たんに價格を引上げるだけで、利潤率には影響しないから、問題にしない。
- (4) Harrod, Op. cit., p. 83. 第二節をみよ。
- (5) M. Kalecki: *Essays in the Theory of Economic Fluctuation*, 1939, Part one I.
- (6) Kalecki, Op. cit., p. 35.
- (7) Kalecki, Op. cit., p. 22, 29. 符號についていえば、 $\bar{\mu}$ は企業の販賣額で加重した平均獨占度、 E は配當をふくむ企業利潤總額、 O は「頭わり費用」の總額、 T は總販賣高、 W は貸銀總額、 A は總租所得をしめす。
- (8) Kalecki, Op. cit., p. 28—29.
- (9) 「頭わり費用」は俸給、利子、減價準備よりなる。
- (10) そのための準備は補足費用を構成するであらう。